

居酒屋

ほったくり

秋川滝美 Takimi Akikawa

4

目次

辿ってきた道……………255

心地よい香り……………209

茶がゆの甘さ……………159

移らいゆくものたち……………111

柔らかく包み込むもの……………57

意地っ張りなサヨリ……………5

意地つ張りなサヨリ

鯛飯

ロブロ(野菜)のおめか

チロコの塩焼

ホタテイカの酢味噌

チロコの塩焼

記念写真の背景は満開の桜、というのがかつての入学式の定番だったけれど、昨今の桜はせっかちでそこまで待つてはくれない。

緑が混じり始めた桜の下で入学式を迎えた新一年生も、数日が過ぎ、なんとかランドセルに馴染んできた。いかにも重そうで、まだ背負っているというよりも背負われている感は否めないが、それでも学校からの道を元気よく帰ってくる。

東京下町にある居酒屋『ぼったくり』の店主——美音は、そんな一年生たちとすれ違いながら『スーパー呉竹』に向かう。仕込みを終わらせても店を開けるまでまだしばらく時間がある。そんなとき、買い物がてら『スーパー呉竹』までウォーキングをするのが美音の健康法のひとつだった。

今日はいつもより時間がある。もうちょっと足を伸ばしてみようかしら……

そう思った美音は、『スーパー呉竹』を通り越し、さらに駅のほうに向かって歩き続けた。

春の陽気に誘われ、いつも駅に向かうときに乗るバス停も通り過ぎてどんどん進む。暖かい日差しは、せっせと歩く美音にはむしろ暑いぐらいだったが、汗をかいたほうがダイエットには効果的よね、なんて自分に言い聞かせる。さらに歩いて、時間もなくなってきたしそろそろ引き返そうか……と思ったころ、大きな工事現場に辿り着いた。

あ、ここ、もう壊し始めたんだ……

そこはかつて鉄鋼会社の社宅だったが、閉鎖が決まり、住民たちは皆転居した。

近隣の住民は、不景気だから買い手がつかず当分そのままになるのではないかと噂していたが、取り壊しが始まったところを見ると無事に売れたらしい。土地の周りに仮囲いが施され、中からは建設重機の唸るようなモーター音が聞こえてくる。

簡易フェンスの切れ間からは、作業服の男たちが図面を覗き込みながら何事か話し合っている姿が見えた。もしかしたらすぐにでも新しいビルが建つのかもかもしれない。

『ぼったくり』の常連客である要か哲が交じっていないだろうか、と美音は目を凝らしてみた。要も哲も建設関係の会社に勤めている。もしかしたらこの現場にも関わっているかもしれないと思っ

だが、目に入るのには知らない男ばかりだった。

「美音さん！」

突然後ろからかけられた声に驚き、美音は振り返る。

そこにいたのは『ぼったくり』で一番若い常連のリヨウだった。

「美音さん、大変つす！」

「どうしたの？ そんなに慌てて」

「ここを買ったのは大手のチェーンストアつす！ 下手すりゃここに、でっかいスーパーができてまう！」

リヨウが告げたのは、全国で大規模に事業展開しているグループ企業の名前だった。スーパー、コンビニエンスストア、百貨店、薬局、トラベル事業、さらには金融業にまで手を広げ、海外進出も盛んにおこなっている。

あの会社が土地を買い上げたのなら、目的はショッピングセンターの建設に決まっている、そうなら美音さんたちの商店街も影響を免れない、とリヨウは心配する。

「こんな中途半端な場所に大きなスーパーを建てたつすで、とリヨウは心配する。」

どうせならもっと郊外にばーんと建てればいいのにねえ、と美音は至つて呑気に答えた。だが、リヨウは中途半端だからこそだと言う。

このあたりに大きなスーパーはないが、買い物をする人がいないわけではない。しばらく行った先に大きな団地がいくつかあるため、駅に向かう途中にあるこの界限を通過していく人は多い。

駅前だつて大きなスーパーはないのだから、ここに新しいスーパーができれば食品や日用雑貨を買いだたい人たちは喜んで利用するだろう。

「それに、商店街あたりに住んでる人だつて、新しくきれいなスーパーができればそこに住むといとは限らないつす！」

いくら商店街が便利でも、アーケードひとつない通りである。雨でも降つた日には、建物の中で全てがすませられるスーパーに行きたくなるのが人情というものだ。商店街存続の危機だ、とリヨウは額に汗を滲ませんばかりになっている。

「聞いてるんですか、美音さん！ もうちょっと驚くとかなんとか、反応の仕方があるでしよう!?」

黙り込んでる美音にしびれを切らしてリヨウが詰め寄つた。

「あ、うん、聞いてる……」

この近隣にスーパーのような商業施設ができる可能性があることは、要から聞かされていた。それを念頭に置いて情報を得るべくアンテナを張り巡らせておくようにと言われたが、あまり大事にして周囲の不安を煽つてもいけない。だから美音は要の忠告を、町内会長のヒロシと、ご意見番で

あるシンゾウに告げるに留めた。

そんな美音にとつてリヨウの話は、やっぱりか……という感じだったのだ。

「ところでリヨウちゃん、どうしてこんなところに？ 今日はお仕事は？」

「さっきまで市場調査をやってたんです」

今日はふたつ先の駅にあるビルの一室を借りて、アンケート調査をやっていた。それを済ませ、会社に戻る電車の中でスマホをいじっていて、偶然、この町についての情報を見つけたそうだ。小さな町だから記事になるようなことは滅多にないのに、どういふことだろう？ と読んでみたら用地買収の話だったのだという。矢も楯もたまらず、途中下車して現場にやってきたらしい。

「やっぱり！ 美音さん、これ見てください！」

リヨウは、そう言いながら工事現場の入り口に貼られた建設業の許可票を指し示した。そこには美音もよく知っている大手流通グループの名前があった。先ほどリヨウが告げたのは、そのグループが展開するスーパーの店舗ブランドである。

「こんな大手が来ちゃったらもう一発アウトっす！」

「でも、ここにショッピングセンターができたら便利になるわね。きつと『スーパー呉竹』よりも遅くまでやってるだろうし」

「なんでそんなに呑気なんですか！」

「だって、こういうショッピングセンターに居酒屋は入らないでしょ？」

『ぼったくり』は平気でも、買い物客をとられて他の店がつかれちゃったらどうするんですか！」

『ぼったくり』は客まで全部含めて『ぼったくり』だ。商店街の店がつぶれて、シンゾウやヒロシ、ミチヤたちが来なくなったら『ぼったくり』の雰囲気が変わってしまう、とリヨウは言う。

「ほんとにそうよね……。ありがと、リヨウちゃん」

リヨウが店を心配してくれる気持ちが嬉しくて、美音は心から礼を言った。

「そういうことじゃな……」

「お、美音坊、いいところで……なんでえ、誰かと思えばリヨウじゃねえか！」

「あ、シンゾウさん！」

そこに通りかかったのはシンゾウだった。リヨウにしてみれば『強力な援軍登場』という心境だったのだろう。継るような声の調子から、この呑気な人を何とかしてほしい、という気持ちが溢れてくるようだった。

「どうした？ こんなところで雁首そろえて」

「シンゾウさん、聞いてくださいよ！」

そしてリヨウは、さつき拾ったばかりのニュースについてシンゾウに説明した。美音はそれとなくシンゾウの様子を窺っていたが、やはり驚いた様子はなかった。おそらくシンゾウは、美音から

話を聞いたあと、あの土地の買い主を調べたのだろうか。

「そうか……じゃあ、あの話、ちゃんと決まったんだな」

「え、シンゾウさん、知ってたんすか？」

「ああ、こないだタクのとーちゃんに聞いた」

「タク……って、誰？ そんな子いたっけ？」

「いやだ、リヨウちゃん。猫のタクよ」

ほら、リヨウちゃんとアキさんが公園から拾ってきた……という美音の説明で、リヨウはやっと思い当たっらしい。

「なんだ、そのタクか。じゃあ、とーちゃんって要さんのことすね。シンゾウさん、どこで会ったんすか？」

「ここ」

なんでも、先日たまたまシンゾウが通りかかったとき、仮囲いの中から出てきた要と鉢合わせしたらしい。

「俺が、なんでえ、あんたの縄張りかい、って言ったら、縄張りじゃないですけどね、って笑ってた。だが、この工事には関わってるみたいだぞ」

「え、要さんって……？」

「要さん、建設関係のお仕事してるみたいですよ」

詳しいことなど美音も知らないが、妹の聲こゑに頼まれて野球場にお弁当を届けに行つたとき、要は哲の相手チームにいた。哲は「取引先」と説明していたから、おそらく建設関係だろうと推測したにすぎない。だから、説明できるのはその程度だったが、リヨウはなるほど、と頷いた。

「そうか、要さんって哲さんと同じ仕事なんだ……」

リヨウの呟きにシンゾウはちよつと考えていたが、すぐに同意した。

「まあ、そうだな……たぶん同じような仕事だ」

「じゃあこのニュースを知ってるのは当然か……。要さんとも、関係してるんですか？」

「いや、わからん。ご覧のとおり、まだ建物を壊してる段階だから、その関係なのかこれから作るほうの関係なのか……」

「そうっすか……」

リヨウはがっかりした様子で、情報とかもらえるかと思つたのに……と呟いた。

「無理だろう。それに、そんなことを聞いたところでどうしようもない。どんな風に建てるかは施主次第だし、建設業者は言われたとおりに建てるまでだ」

そう言いながら、シンゾウはにやりと笑った。

「それよりリヨウ、お前、こんなところでいつまでも油売ってていいのか？」

電車の乗り継ぎが上手くいきませんでした、では通らないぐらい時間が経ちまってるんじゃないかねえか、とシンゾウはリヨウに注意を促した。

「やべっ！　じゃあ美音さん、また店で！」

そしてリヨウは、大慌てでバス停に向かって走っていった。

「落ち着かねえ奴だなあ、ほんとに」

リヨウを見送りつつシンゾウが苦笑いをする。

「そういえば、シンゾウさん。どうしたんですか、こんなところで？」

平日の昼間である。夕方から店を開ける『ぼったくり』とは異なり、シンゾウの薬局はまだ営業時間内のはず。店番はどうしたのだろう、リヨウちゃんに油を売っていいのかなんて言ってる場合ではないのでは？　と美音は不思議に思った。

「実は、ちよいと野暮用があつて出かけてきたところだ。今日は娘が来てるから店番は頼んできた」  
「モモコさんが戻ってきてるの!？」

早く言ってくれよ！　と美音が大きな声を上げたのにはわけがある。

シンゾウにはオサムとモモコという、既に独立し、家庭も持っている子どもがいる。下の娘であるモモコは美音よりも十歳ほど年上だが、彼女は小さいころから美音を妹のように可愛がってくれた。

モモコは、自分が読み終えた本や飽きてしまったおもちゃを気前よくくれたり、勉強を教えてくれたり、それ以外にもあれこれ面倒を見てくれた。そんなモモコが美音は大好きで、彼女が結婚してこの町を出ていったときは本当に寂しかった。

モモコはいかにも薬局の娘らしく大学で薬学を学び、無事に薬剤師の資格も取った。誰もが、このままシンゾウのあとを継ぐのだろうと思っていたのに、卒業して間もなくお嫁に行ってしまったのだ。

相手は地方から上京してきた同級生。大きな病院の息子で、郷里に戻って院内薬局に勤めることになっていた。兄のオサムは薬学を志さなかったために、モモコはシンゾウの薬局をどうするか相当悩んだらしいが、結局『自分の幸せを取れ』とシンゾウに諭され、後ろ髪を引かれる思いでこの町を離れた。

遠く離れた町に嫁いだだけに滅多に戻ってくることもなく、戻ったところで美音自身が忙しくてゆつくり話す暇もない。それでも、モモコが戻っていると聞いたら一目でも会いたい。美音は思わず駆け出しそうになってしまった。

「美音坊、そんなに慌てなくてもモモコは逃げねえよ」

「だってモモコさん、忙しいからっていつつもとんぼ返りじゃないですか」

「それが、今回はちよいとゆつくりしてくれそうだ」



「え……？」

シンゾウの意外な言葉に、美音は走り出そうとした足を止めた。

「ちようどいいや。美音坊、あいつの話を聞いてやってくれねえか。なにやら悩んでるようなんだが、俺たちには言いたくないらしくてよ」

モモコは子どものころから典型的な優等生だった。プライドも高く、親の前ですらめったなことでは弱音を吐かない。これはウメから聞いた話だが、そのせいで、シンゾウ夫婦が扱いに困ったこともあつたらしい。

小さな大人そのものだったモモコのことだから、今回だつて悩みを抱えて親元に戻ってきていても、素直に言い出せないのかもしれない。

だが幼なじみで、しかもうんと年下の美音であれば、ちらりと本音を覗かせる可能性も無きにも非ず、とシンゾウは言うのだ。

「美音坊には失礼な話だが、あいつの中に『何にもわかってない子ども』つて意識が残つてれば、独り言みたいに愚痴を漏らすかもしれないねえと思つてさ」

「なるほど……それはあるかもしれないね」

まだ美音が小学生だったころ、モモコは通っていた高校でいじめにあっていた。優秀で教師の覚えが良く、男子生徒からも人気があつたモモコをやっかんた女子生徒たちの仕業だった。そのとき

もモモコは、教師にもシンゾウ夫婦にも告げずに耐え続けた。放課後、思い詰めたような顔で公園のベンチに座り込んでいたモモコは、たまたま入ってきた美音としばらく遊んでくれた。その間に「あーあ、ドシ踏んじやった」とか「いじめなんて最低！」とか呟くの聞いた美音は、家に帰つて母に訊ねた。

『ドシ踏む』つてなあに？』

怪訝な顔になつた母は、その言葉をどこで誰から聞いたのか、それ以外にどんなことを言っていたのかを美音に訊き、モモコがいじめにあつて居ることを察した。そして、おそらく店にやつてきたシンゾウにも伝えたのだろう。

シンゾウ夫婦がどんな対応をしたかはわからないが、それ以後、モモコが思い詰めたような顔で公園のベンチに座っていることはなくなつた。

「あのときみたいに上手くいくかどうかはわからないが、ダメ元で頼む」

日頃からお世話になりっぱなしのシンゾウに、こんな風に頭を下げられて断れるわけがない。美音は、お役に立てるかどうかわからないけれど……と断りを入れながらも、シンゾウの頼みを引き受けた。

「モモコ、今帰つたぜ！　そこで美音坊に会つたから連れてきたぞ」

「あら、美音ちゃん、久しぶり！ 元氣そうね」

「はい。おかげさまで。モモコさんもお元氣でしたか？」

「おかげさまで私も元氣よ！」

元氣そうなモモコの様子に、美音は思わずシンゾウの顔を見た。シンゾウは微かに目を細めたあと、明るく言い放つ。

「とりあえず、店番ご苦労さん。駅前で甘いものを買ってきたから、美音坊と一緒にちよいと目方でも増やしやがれ」

シンゾウが、そんなことを言いながら手にしていた紙袋を掲げると、モモコは呆れたような顔で答えた。

「やだ、お父さん、なんて言い方！ そんなこと言われたら、私も美音ちゃんも食べるに食べられないじゃない！」

「食ったら太る。そんなの当たり前じゃねえか」

「身も蓋もないわね。まあいいわ、美音ちゃん、お茶にしましょう」

そしてモモコは、美音を奥の部屋に誘った。

「ほんと、お父さんってちつとも変わらない。もうちょっと可愛げのある年寄りになればいいのに」

「大きなお世話でえ！」

そう言い返したシンゾウに、モモコはあかんべえをした。子どもみたいな仕草のあと、もっと子どもみたいな嬉しそうな顔で紙袋を受け取り、奥の部屋に上がっていく。見送ったシンゾウの口から、俺の前じゃあ、いつつもこんなだ……という呟きが漏れる。

美音の目にもモモコは以前と変わらないように見える。だが、シンゾウの話から考えるに、モモコはシンゾウに心配かけまいとして空元氣を出しているのだろう。

美音は「お邪魔しまーす」と言いながらモモコに続いて小上がりになっている部屋に入り、店との仕切り戸をすつと閉めた。

十

その日、『ぼったくり』にシンゾウがやってきたのは、いつもより少し遅い時間だった。

モモコの話が気になるだろうに、あえて遅くやってくるところがいかにもシンゾウらしい。息せき切って、という感じは『粹』じゃないと判断してのことだろう。しかも、客が途切れそうな時間を見計らって来たようなのに、自分からはモモコの話に触れようとしないという念の入れようであった。

「今日のおすすめはどんな感じだい？」

精一杯のやせ我慢で彼が口にした言葉に、いつもどおりの笑みを返し、美音は冷蔵庫から取り出した酒を注ぐ。

「サヨリのいいのが入りましたよ。山菜も珍しいのが……でも、まずは一杯どうぞ」

「ありがたいよ。おつ、『満寿泉』か！ 久しぶりだな、この酒は」

「自分でも不思議なんですけど、春になると、このお酒を入れたくなるんですよ。吟醸酒特有の香りと柔らかい甘さが春を思わせるのかもしれない」

「ああ、わかるわかる。前にしゃしゃり出てくるわけでもねえのに、ちゃんと吟醸酒だつて感じさせてくれる。ふと気が付くと萌え始めてる木の芽みたいだ」

「そうなんですよ！」

美音は、うまく説明できなかったこの酒の印象を、シンゾウが的確に言葉にしてくれたことが嬉しくて、つい大声を出してしまった。

「よその蔵の大吟醸に匹敵しますよね！」

『吟醸の満寿泉』って言われるぐらいだからなあ。吟醸酒にかける思いは深いだろうよ」

シンゾウの言うとおり、『満寿泉』を作っている榊田酒造店は、まだ吟醸酒というものが脚光を浴びる前——昭和四十年代半ばから吟醸酒造りに力を注いできた蔵である。昭和四十七年以降は鑑評会の金賞受賞常連となり、全国にその名を知らしめている。

日本酒愛好家の人々は大吟醸酒の素晴らしさを褒め称えるし、そのことについては美音も異論はない。だが価格が手ごろな上に、バランスのいい優れた味わいを持っている『満寿泉吟醸』は、庶民派『ぼったくり』にとつて、とても頼りになる酒だった。

「この酒はなあ……ちょっとだけ冷やす、あるいはちよつとだけ温めるってあたりが一番旨いと思ってる。だからこそ、暑すぎたり寒すぎたりしねえ春が、この酒には似合うのかもしれない。美音坊の言うとおりだな」

俺は思ってる、という言葉に、シンゾウの酒に対する懐の広さが窺える。酒の呑み方はいろいろあり、造った蔵、あるいは売っている酒屋がすすめる呑み方を気に入る人ばかりとは限らない。それぞれが好きに呑めばいいが、自分はこの呑み方が好きだ、とシンゾウは言う。

どんな意見も評価も、こうやって他人の思いに余地を残して表せば、押しつけがましく聞こえないし、喧嘩にもならない。

目を細めてグラスに口をつけるシンゾウに、美音は今日もひとつ教えられた。

——シンゾウさんにはいつも教えられてばかり。でも今日は、私がシンゾウさんの役に立てるかもしれない。

そして美音は、シンゾウが気になって仕方がない話題を持ち出した。

「シンゾウさん、今日はありがとうございました。久しぶりにモモコさんとゆっくり話ができて嬉

しかったです。カノンちゃんとも遊ばせてもらって、すっかり仲良しになっちゃいました」

「おう。喧しい孫の相手をしてくれてありがとよ。モモコも美音坊と話せて喜んでたぜ」

「それで……」

「で……」

同時に口を開いたふたりの言葉がぶつかって、シンゾウと美音はどちらからともなく笑い出してしまった。

「だめだな、恰好つけたって親ばかりは親ばかりだ。モモコの様子が気になって仕方ねえ」

「当たり前じゃないですか」

離れて暮らす娘が急に戻ってきた。しかも何か心配事がありそうだと、となったら気にならないほ  
うがおかしい。美音の言葉に、シンゾウはすっかり開き直ったらしかった。

「そう言ってくれると気が楽になるぜ。で、うちのはいったい何が原因で出戻ったんだ？」

「え、モモコさん、出戻ったの？」

突き出しの小鉢をシンゾウに出した馨が、驚いて素っ頓狂な声を上げた。慌てて美音が訂正する。

「違うわよ。シンゾウさんも、そういう言い方しちゃだめですよ」

「確かに。ほんとならなっちまったら困るもんな」

苦笑いのあと、シンゾウは小鉢の中のホタルイカを酢味噌に絡めてばくりとやった。

こいつが出てくると北陸も春だな、と呟いたあと、カウンターの向こうの美音を見上げて言葉を送る。

「モモコさん、旦那さんとちよつとあったみたいですよ」

「言いたい放題でやつつけちまったわけじゃないだろうな？」

末っ子の特性、とでもいうのだろうか。家族で一番年下の者はムードメーカーの役割を負いやすい。  
馨も同様であるが、その場を盛り上げたいばかりに、言葉を選ばず突っ込みを入れたりする。周  
りの者に見れば、いささか言葉が過ぎると思うこともあった。

シンゾウから見えたモモコは、まさしく『言いたい放題』だったのだろう。

「まったく、あのお調子者は……」

「お調子者だって悩みがないわけじゃないもん」

馨は憤然としてモモコを庇う。きつと末っ子同士、気持ちかわかるのだろう。

「そいつは失礼した。だが、いったい何で……。あいつは亭主にべた惚れで、亭主さえいれば大丈  
夫だって言い張ってやがった。亭主のほうだってモモコを気に入ってくれたし、俺たち夫婦も、  
これなら離れたところに出しても大丈夫だろうって……」

「そうだよ、モモコさん、誰にも負けないくらいラブラブ夫婦になるんだって言ってたもんね」  
そのモモコさんが夫婦喧嘩、しかも実家に帰るほどって……と馨も首を捻っている。

「自分に自信があまりすぎるのが問題なのかも……って言ってたわ」

薬学部への入学試験は難しいと聞いている。モモコはそれを楽々突破して入学、国家試験にもすんなり通った。将来の伴侶も早々に決め、彼の親が営む病院で働くことになった。実家からは遠く離れているし、両親のことや薬局の今後も気になるけれど、それは仕方がない。おおむね順調な人生を歩んでいるとモモコ自身も思っていた。

ところが、いざ結婚してみたら、同じ病院に勤める医者のおおむねの大半が彼の一族だった。しかも夫自身、医学部を目指すもかなわず薬学部に進んだという過去があり、家族に対する劣等感が強い。

仕事を始めたばかりのころは、失敗もたくさんしたし、身内だから余計に厳しく言われることも多かった。でもそれは、仕事に慣れて病院の役に立つうちに変わっていくだろうと思っていた。ところが、二年、三年と過ぎても夫が自分を卑下する気持ちは変わらず、むしろどんどん大きくなっていった。

そのうち家族、特に夫の兄弟の伴侶たちが、薬剤師夫婦であるモモコたちを軽んじ始めた。最近では、本人が医者にならないのなら、せめて医者と結婚してくればよかったのに、と嘆くようになってきた。

「うちの病院、お医者さんが足りないのよ。特に女医さんがほしいみたいで……」

モモコの夫が、小児科とか産婦人科の女性医師と結婚してくれば、うちの病院で働いてもらえただのに、とまで言われたらしい。

そうなるかと、モモコだって面白くない。自分自身を否定されたも同然だからだ。

「彼には、薬剤師のどこが悪いのって言ったんだけどね……」

夫は小さいころから医者の中で育ち、自分も医者になるとばかり思ってきた。それなのに医者になれなかった——その悔しさ、情けなさは、どうやっても払拭できない。親族が医者ばかりという状況がさらに拍車をかけ、夫は俯くばかり。その状況にうんざりしているのだ、とモモコは言う。

「私はお父さんが町の人たちの身体を心配して相談に乗ったり、簡単にできる健康法をすすめたりする姿を見て育ってきたの。だから、薬剤師の果たす役割についてはよく知ってるし、誇りも持っているのよ。医師は病気や怪我を治す大事な仕事だけど、薬剤師だってそれに負けず劣らず立派な仕事なの。そのことを彼にもわかってもらいたいのに……」

もちろん、町の薬局と大病院の院内薬局とは認識が違うのかもしれないけれど……とモモコはもどかしそうに語った。

「モモコさん、すごく悔しそうですね。『うちは代々薬屋で、それを卑下したことなんて一度もな……』」

「へえ……そうかい」

シンゾウがわずかに頬を緩めた。

薬剤師という職業を選んだ時点で、モモコが家業に否定的ではないことはわかっていた。それをはつきりと口に出されたことで確証を得た、といったところだろう。

「やっぱり何浪しても医師を目指すんだって、って嘆かれると、ふざけるなって言い返したくなるそうです。だいたい、目の前に同じ薬剤師がいるのにその発言は何なの、私に対する配慮は全然ないの？ って腹が立つって」

「それで急に帰ってきたってわけか……」

これまででは、たまに帰ってくるのがあってもせいぜい一泊二日。今回のように、しばらくお世話になるわ、なんて長期戦覚悟で乗り込んでくることなどなかった。しかも後顧こうこの憂うれいなしを狙ってか、娘まで連れて……

「それでモモコさん、仕事は大丈夫なの？」

先の見えない休暇ってありなの？ と馨が心配そうな顔をする。確かに、いくら大病院で薬剤師が何人もいるといつても、休み続けるのは問題があるだろう。だが、それに関しては大丈夫らしい、とシンゾウがちよっと嬉しそうに言う。

「あいつ、言わなかったのか？ 今、腹にふたり目があるんだ」

「え!? そうなの!？」

そんな話は一言も出なかった、と美音は目を見張る。馨は、わあー、じゃあまたこっちに帰ってきて産むのかな、楽しみくと脳天気喜んでる。ひとり目のときは里帰り出産でこの町に帰ってきた。きつと今回もそうだろう、と期待しているらしい。

「まあ、そうなるだろうな。こっちで産むなら、一度は診みてもらわなきゃならないからって休みを取ってきたらしいし」

「やったー！ じゃあそのときはカノンちゃんともいっぱい遊べるね」

馨は動物も好きだが子どもも好きだ。だが、あいにくこの町には幼児が少ない。たとえ一時的にでも、年寄りが多いこの町に子どもが増えるのは嬉しい、と大喜びしている。もちろんそれは、美音も同様だった。だが、それが理由で帰ってきたとわかってるなら、なぜシンゾウは、なんか理由がありそうだから話を聞いてみてくれないか、などと言ったのだろう。

その疑問を口にした美音に、シンゾウは少しきまり悪そうに答えた。

「いや、俺じゃなくてサヨがさ……」

戻ってきたモモコの様子をしばらく見ていた妻のサヨが、あの子ちよつと変だわ……と言い出したそうだ。

きつと悩みがあるに違いない。でもあの子のことだから、私たちに心配かけたくなくて言い出せ

ずにいるのだろう。なんとか探れないものかしら、と……

「母親って奴は恐ろしいね。ずーっと離れて暮らしてる娘の顔色を一発で読むんだからさ」

そりゃあ亭主の悪行もすぐばれるってもんだわ、とシンゾウは苦笑いを浮かべる。美音から見れば、シンゾウは悪行などとは縁がなさそうに思える。でもそれは今となってはの話で、若いころはやんちゃだったのかもしれない。

「お母さんっていうのは、それだけ子どもを見てるんだろうね。ちょっと違ったところがあればすぐわかるぐらい……」

馨が少し遠い目をしてそう言った。おそろく、亡くなった母に思いを馳せているのだろう。

「まあそうだろうな。父親のほうはてんでほったらかしだけだな」

シンゾウは、今度は苦笑いではなく、はははっ！ と元氣よく笑った。美音と馨は顔を見合わせ、くすりと笑う。

ほったらかしなんてとんでもない。やるべきことは充分にやっている。だからこそ、こんな風に茶化せるのだと姉妹にはちゃんとわかっていた。

「にしても……モモコの亭主にも困ったもんだな」

「自信のない男っていらいらするよね！」

まったくさあ！ と馨はちよつと鼻息を荒くする。

「おや？ やけに厳しいねえ、馨ちゃん」

「だって、哲君もときどきそうなるんだもん！ 俺なんか、俺なんかって言われたら、その俺のことが好きなあたしはどうなるの？ って思わない？」

「なんでえ、ただの惚気か」

「え……？」

馨には、そんなつもりはまったくなかったのだろう。でも、聞いているほうにしてみれば、それは明らかに惚気。シンゾウに一刀両断されて当然だった。

「でも、モモコさんにも同じような気持ちがあるのかもしれないよ。薬剤師って仕事を軽んじられて面白くないのと同時に、旦那さんがそれに負けているのも情けない、私が好きになった人なのに……って」

「あるかもなあ。モモコはあれでけっこう旦那に惚れてるし、必要以上に自信たっぶりのところがあるから、そうじゃない人間を見るといらいらもするだろう。ましてや自分が選んだ相手がそれじゃ」

必要以上ということはないだろう、と美音は思う。

『男は外、女は家』の時代は遠く去ったとはいっても、女性が仕事を続けていくのはまだまだ楽ではない。モモコのように国家資格を持つ専門職にしても、いろいろ難しいことがあるだろう。女ながらに居酒屋の暖簾のれんを守る美音にはなんとなくわかる。

難しいあれこれに立ち向かうために、自信はあるに越したことはない。美音にしても、今日一日を何とか乗り切ろうと、精一杯胸を張っているのだ。

でも、美音たち姉妹に母としての気持ちがわからないのと同様に、シンゾウにも働く女性であるモモコの気持ちを計りかねる部分があるのかもしれない。そう思った美音は、あえてそれについて語ることはしなかった。

「ワンマンで俺様すぎる男も面倒だけど、その逆もね」

「なにごともほどほどがいいってところだな」

「ほんとほんと」

シンゾウと馨は何やら意気投合している。ふたりの会話を聞きながら、美音はなおも考え続ける。自信があまりすぎても困るし、なさすぎても困る。でもその兼ね合いはとても難しい。ほどほどなんて気楽に言われても、当人してみればさっぱりわからないだろう。敵を作らずにすむように自信がないふりをして陰に隠れるか、敵を撥ね返せるように虚勢を張るかのいずれかしかないのかもしれない。モモコにしても、なけなしの自信を精一杯大きく膨らませている可能性だってあるのだ。

「おいおい、美音坊、俺はそんなに食べねえよ」

シンゾウの声ではっとして手元を見ると、そこにはひとり分には多すぎる量のサヨリが積み上

がっていた。シンゾウが注文した天ぷらの下拵しんていごで、開いたサヨリと大葉を重ねてくるくる巻いていたのだが、考え事をしていて作りすぎてしまった。

「ごめんなさい。確かに、ちょっと多かったですね」

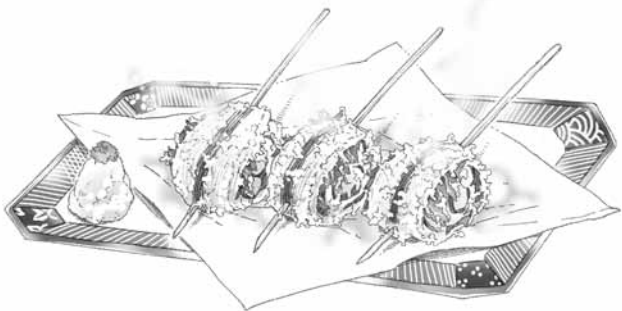
照れ笑いをしながら、美音は作りすぎた分を冷蔵庫にしまう。サヨリは旬の食材だし、揚げたての天ぷらを好む常連は多い。きっと誰かが注文してくれるだろう。

串で留めたサヨリに薄く天ぷら粉をまぶし、さらに溶いた天ぷら粉にくぐらせてから油に泳がせる。

じゅっ！ という気持ちのいい音がしてサヨリの周りに大きな泡が立つ。真剣な眼差しでサヨリを見つめていた美音は、泡が小さくなって浮き上がってきたところで引き上げ、油を切った。

「おまたせしました」

敷紙をのせた皿に移し、カウンター越しにシンゾウに渡す。本来なら馨に運ばせるべきなのだが、揚げたてを





食べてほしくてちよつとの時間を惜しんでしまう美音だった。

「塩と天つゆ、お好きなほうで、と言いたいところですが、できれば両方お試しください」

きっぱりとそう言い切った美音に、シンゾウが笑い出した。

「どっちも旨いから、って言うんだろ？ 美音坊も自信たつぷりだな。いやはや『女は強し』だな」

「自信なさそうにお料理を差し出す料理人なんて嫌でしょ？」

「ごもっとも。じゃあおすすめどおり、両方でいただくとするか」

そう言いながらも、シンゾウは既にサヨリのひとつにレモンを搾しぼっている。手で持った串刺しのサヨリに塩をちよつとつけ、そのまま口に運ぶ。衣をかみ切るさくつという音が微かに聞こえた。

サヨリの食感とレモンの酸味、そしてほどよい塩辛さを感じているのだろう、シンゾウが目を閉じて唸る。

「このかりつとした衣の中にある白身の柔らかさはどうしたもんだ！ さくさくとふわふわが口の中で混じり合ってどうにも堪たえられねえ！」

しかもそこに大葉の香りまで加わって、もうどうしていいやら、とシンゾウはもんどりを打っている。挙げ句の果てに、なんてもんを出しやがるんだ！ とまで……

大葉とサヨリのコラボレーション。塩とレモンの相性なんて語られるまでもない。口の中いっぱい広がる春の味わいを堪能しながら、シンゾウはしみじみと言う。

「春だなあ……春は本当に天ぶらの季節だなあ……」

「春は天ぶらの季節って……天ぶらはいつだつて美味しいじゃない。天ぶらにできない食材なんて思いつかないよ。あたしなんて、無人島に何を持っていきますかって訊きかれたら、天ぶら油って言うじゃないさう」

それじゃあ生き残りは難しそうだな、とシンゾウに言われ、馨は口を尖らせている。そんな妹に呆れつつも、美音も天ぶらは春、というシンゾウの意見に賛成だった。

「春が旬の食材って、どれも天ぶらにぴったりですよ。野菜も魚も……」

「だろ？ 山菜なんていい例だ。待ちに待った春、やつと芽吹いた山菜をとつと取って揚げて食っちゃまうなんて人間もひどいもんだが、これだけ旨いとなあ……」

「あー山菜……確かに、そうだね。でも春になって生えた山菜が全部育ったらそれはそれで困るんだから、自然淘汰しぜんたうたってことでいいんじゃない？」

「おお、馨ちゃん、いいこと言った！」

馨は、山菜と聞いただけで『天ぶらは春』派に転向したらしく、シンゾウと意気投合して喜んでいる。それを横目で見ながら、生えた山菜が全部育って困る人って誰だろう？ と美音はちよつと悩んでしまった。山の管理をしている人、環境について考えている人……まあ、なんにしても、山も荒らさず、乱獲もせずに自然の恵みを享受するくらいなら支障ないだろう。

塩とレモンでサヨリの天ぷらを堪能したシンゾウは、続いてもうひとつを天つゆの小鉢に浸した。「蕎麦は下のほうをちよつぱり、つてのが粹らしいが、天ぷらのつゆはどつぱりつけたって許されるよな」

シンゾウは、衣が水分で湿りすぎないように急いで引き上げ、口に運ぶ。少し時間が経っているし、天つゆに浸したことで天ぷらの温度も下がっているので、頬張ったところで火傷をする心配もない。衣を通じて天つゆの甘みがサヨリ全体に絡まり、塩とレモンのシャープさとはまったく違った味わいを醸し出す。同じサヨリの天ぷらなのに、添える調味料を変えるだけで別の料理のようになる、と常連たちはいつも喜んでくれていた。

口の中全体で魚を味わいつつ『満寿泉』をまた一口。シンゾウはまさに春の味わいを満喫していた。

悩みがない人なんていない。今だって、シンゾウの中にはモモコへの心配がある。その心配は美音から事情を聞いたことで、もっと大きくなったのかもしれない。でも、今、この一瞬だけは、それを忘れて料理を楽しんでくれている。

シンゾウが家に帰ったあと、サヨにこの話をして、またふたりして心配のため息を重ねることはわかってる。だからこそ、たとえ一時でも憂いを晴らしてもらえてよかった。食が人を癒す役割は大きいと改めて思う美音だった。

十

「要さんは、自信があるほうの人ですよね？」

美音の質問に、要がぶほつと酒を噴きそうになった。

シンゾウがカウンターにいる間に、他の常連たちが何人かやってきて、『ぼつたり』はいつもながらの和やかな雰囲気が続いた。それぞれが『春の味わい』を堪能して帰ったあと、引き戸を開けたのはいつもの閉店間際の客——要だった。

客が一度にやってきて、その対応に追われている間はシンゾウの心配を忘れていられた。だが客の波が引き、馨も家に帰したあと、美音はやっぱりモモコのこと気がなくなってしまった。

——お医者さんになりたかったのはわかるけど、もう薬剤師さんになってるんだからその道で頑張ろうって気持ちになれないのかしら。モモコさんは実家から遠く離れて、しかも旦那さんの一族に囲まれて、それでも頑張ってるじゃない。カノンちゃんもいるし、新しい家族も増えるんだから、もっとモモコさんを支えてあげてほしいのに……

モモコの夫について、否定的な気持ちがあふくれあがり、自分でも持て余しそうになっていた。そこに要が現れて、美音はつい、会ったこともないモモコの夫と要を比べてしまったのだ。

「なんだよ、それ。しかも『ですか?』じゃなくて『ですよね?』ってほとんど断定じゃないか」  
要の様子を見て、疲れているんだろうなと思うことはある。身体だけではなく、気持ちも大変みたいだな、と感じることも多々あった。けれどそれを本人から言い出したことはないし、美音にはこの男が、アキやリョウのようにカウンターに突っ伏してしおれている姿なんて想像もできなかった。

落ち込むことってありますか? と質問を重ねた美音に、要は呆れたように言う。

「あのねえ……おれだって人間だからたまには落ち込むし、うじうじもする。かっこつけて隠してるだけ。今だってさ……」

何かあったんですか? と水を向けたほうがいいのだろうか。でも……と悩みつつ美音は、要の顔をじっくり見てしまった。

「新しい仕事はわからないことばかり。慣れてないんだから当然だけど、教えてもらいたくても周りもみんな忙しい。自力で何とかしなきゃ、って夜遅くまで頑張ってみてもやっぱりわからないしかも、ここはわかった、これでいける、と思ったことが全然見当違いだったり……もうね、情けなくなるよ」

「本当は、周りが忙しいからじゃなくて、教えてって言えないんじゃないですか? 教えてもらう

なんてプライドに関わるから……」

小首を傾げながらそんなことを訊いた美音に、要はちよつとやましそうな顔をした。

「ばれたか」

まあおれも、昨日や今日会社に入った新人じゃないしね……と言いながら、要は美音が差し出した徳利をカウンター越しに猪口で受ける。

美音は、シンゾウが冷酒で呑んだ『満寿泉吟醸』を今度はぬる燗にしていた。夜が更けて気温が下がってきたせいもあるが、珍しい山菜を味わってもらうには燗酒のほうがいいと思ったからだ。

本日のもうひとつのおすすりめ料理を小鉢に盛りつけながら、美音はさらに質問をした。

「それに、自分から名乗りをあげた仕事だから、泣きごとは言いたくない?」

「そのとおり。お見通しだな」

「大変ですわね……でも、ここは会社じゃないんですから、泣きごとぐらい、いくらでもどうぞ。仕事を教えてって言われても困りますけど」

「うーん……それもどうかなあ」

燗酒をゆつくりと口の中で転がしながら、要は首を傾げる。

「来たときよりもちよつとだけ元気になって帰ってほしい、って言ったじゃないですか。泣きごとを言って元気になれるなら、いくらでもどうぞ。私、誰にも言いませんから」

「でも、おれが本気で愚痴<sup>ぐち</sup>りしたら目も当てられないよ。罵詈雑言<sup>ぼりぞごん</sup>吐きまくるかも。何せおれ、そいつみたいだからさ」

そう言いつつ要が目をやったのは、美音が塩焼きにするために取り出したサヨリだった。怪訝<sup>けげん</sup>な顔になった美音に、要は言う。

「真っ黒なんだろう、そいつの腹の中」

あつと思つた瞬間、吹き出した。確かにサヨリは、腹を開くと中が真っ黒だ。そのすんなりと美しい外見からは想像できないほどである。よりもよってそんな魚に自分をたとえるなんて、と美音は笑いが止まらなくなつてしまった。

「そこまで笑わなくても……」

「ごめんなさい。ちよつと変なツボに入っちゃつたみたいで……。でも、いくらお腹の中が真っ黒でも大丈夫です」

「大丈夫って？」

「うちでは食べて美味しければそれが正義です。だからいくらでも腹黒丸出しで、罵詈雑言<sup>ぼりぞごん</sup>吐きまくつてください」

それはどうも、と要は軽く頭を下げた。だが要は、それ以上仕事の話をすることも、泣きごとを言うこともなかった。

「我慢できなくなつたら、吐き出させてもらうことにするよ」

そして彼は、小鉢の中の和え物<sup>あえもの</sup>を一箸口に入れる。

「これ……食べたことない味だ。なに？」

「ミズっていう山菜です。赤ミズと青ミズがあつてこれは赤のほう」

「どう違うの？」

「味も食感もよく似てるんですが、生えてる場所が違うそうです。青ミズは山の奥の涼しくて湿つた場所に限られるみたいですが、赤ミズは水があるところならけっこう生えてるらしいです」

「そうか。赤ミズのほうが庶民的なんだな」

山菜相手に庶民的<sup>しゆてん</sup>の表現はどうなの？　と思わないでもなかったが、手に入れやすいという意味では確かに庶民的なのかもしれない。そう納得した美音は、ちよつと自慢げに言った。

「庶民的なら、うちに似合いですね。しかも塩昆布をまぶしただけっていう手抜き料理ですし、まさしく『ぼつたくり』」

「手抜きねえ……」

要はそう言いながら、箸でつまみ上げた赤ミズをしみじみと見た。

「これさ、下拵<sup>したて</sup>えが大変じゃないの？」

「え？」

「山菜つてどれも、灰汁を取ったり皮を剥いたりで大変じゃないか」  
鋭い……

美音は感心せずにはいられなかった。確かに山菜というのは、野菜に比べて断然手がかかる。同じような見てくれであっても、小松菜ならば茹でるだけですむが、赤ミズは皮を剥かなければならない。それをするのでしゃきしゃきの食感が得られるのだが、細い茎の皮を一本一本剥くのは大変な作業だ。しかも店で使うものだから量もそれなりにあって、今日は朝から髻とふたりがかりだった。そんなに手にかかる山菜だからこそ、せめて味付けぐらいは……と塩昆布であえるだけに止めたのである。

「だと思った。君の言う『手抜き』はたいてい部分的なんだよね」  
要はやけに嬉しそうに笑って言う。まるでからくりを見抜いてやったぞ、と言わんばかりの顔だった。

「見た目はすごく簡単そうに見えるけど、裏で随分手をかけてる。だからこそ旨いんだろうね。全編にわたり手抜き一辺倒、とかだったら旨いはずがないよ」

「あ、でも、素材がよければ……」

手をかけないほうが美味しいものだってあります、と続ける前に、要が口を挟んだ。

「その素材を探してくること自体が大変だろう？」

「それだってヒロシさんやミチヤさんが……」

野菜だつて魚だつて肉だつて、商店街の人たちがとびつきのものを届けてくれる。美音はそれを受け取って料理するだけなのだ。ちっとも大変じゃない。

「確かに出入りの店はよくしてくれるかもしれない。でもそれは君と君のお父さんが作ってきた信頼関係の結果だよ。考えようによっては、下拵えよりずっと手のかかることかもしれない」

その信頼関係に基づく確かな仕入れができないとしたら、きっと君は自ら市場なり産地なりに乗り込んで食材を探さだろう。要するに、手抜きに徹するなんて不可能だね、と要は断言する。

「その恩恵に与る身としては、いつまでもそうあってほしいけど、君は大変だろう。身体を壊しても困るし、あんまり頑張りすぎないほうがいいよ」

そんなにはつきり言葉にしないほしい……

言葉が足りないかと責められる男は多い。要にしても、つい最近までは本当に言葉が足りなくてよくわからない人だと思っていた。けれど、このところの彼はやたらと饒舌で、しかも人の琴線に触れるような言葉ばかりを選び出す。

『ぼったくり』の常連や下町の人たちは、心根は優しいけれど、言葉はぶつきらぼうだったり、足りなかつたりする。そんな荒削りな表現に慣れている美音は、要のストレートな劣い言葉に戸惑

うばかりだった。

「あ、ありがとうございます。気をつけます」

頭を下げた拍子に、魚の焼き網が目に入った。塩をしたサヨリにこんがりこんがりと焦こげ目がつきつつある。あわててサヨリをひっくり返したあと、美音は冷蔵庫に向き直り、焼き魚に合う酒を選び始めた。

十

四月も終わりに近づいたある日、カウンターに座ったのはリヨウだった。

「あの現場、もう取り壊し終わっちゃったんすね」

「そうね。ブルドーザーとかも残ってないから、整地まで終わってたんじゃないかしら」

何かの加減で中止にでもなればいいと思っていたのがっかりだ、とリヨウはつまらなそうに言う。

「しょうがねえさ。始まった工事はそう簡単に止まりやしねえよ。ま、一杯やんな」

相客のシンゾウは慰めるなぐさるように言う、ほどよく冷えた銀ラベルのビールをリヨウのグラスに注いだ。ごくごくと中程まで呑んだあと、リヨウはまた、あーあ……とため息をつく。

「そんなにため息ばかりついてないで、これでもご覧くださいな」

そう言うと言は本日のおすすめの品書きを差し出した。

「ほら、今日はリヨウちゃんの大好物があるよ！」

気乗りしない様子で受け取ったリヨウは、そこに書かれている料理名を見て歓声を上げた。

「うひょー鯛飯たいめし、やったー!! 俺、炊き込み飯系大好き!

美音さん……」

「わかってますって、大盛り、でしょ?」

「びんぼーん!!」

急に目を輝かせたリヨウに、美音は、あのため息満載の姿はなんだったの、と思う。ふとシンゾウに目をやると、彼も苦笑いを浮かべていた。

「この町を心配してくれてるのかと思いきや、鯛飯ひとつでこれとはな」

「それとこれとは話が別つす!」

やがてリヨウは、目一杯盛りあげられた鯛飯を元氣よく掻き込み始めた。が、すぐに、添まえてあった山椒さんしやうの芽を呑み込



み損ねてむせてしまい、シンゾウに呆れられる。

「まったく、風情も何もあつたもんじゃねえな。せつかく美音坊がいい出汁だしを使って上品に炊きあげてくれたつてのに、台無しだぜ」

「のんびり食ってられないほど旨いんだからしょうがないっす。特にこの、飯がちよつと焦こげたとこなんて最高！　そもそも、俺に上品さなんて求めるほうが間違つてるっす！」

「ちよつとは努力しやがれ！」

シンゾウはそんな小言を言う。だが、瞬またく間に器を空にしてくれるリヨウは、料理に花丸をつけてくれているように思える。食べ終わって満足のため息を漏らすリヨウを見ながら、美音は上品さなんてどうでもいいと微笑まずにいらなかった。

「……その後、モモコさんはどんな感じですか？」

リヨウが大盛りの鯛飯を平らげて帰り、客がシンゾウだけになったところを見計らつて、美音は話を切り出した。

「うん。美音坊にも心配かけたが、どうやらやつと重い腰を上げて帰る気になったようだ」

「それはそれは……」

帰る気持ちになったところを見ると、家族の間でなにか解決に向かうような話し合いがなされた

のだろう。美音はその内容が気になって仕方がなかった。

「家の中でぐらい弱音を吐かせてやらねえと、よそに飛んで出ろぞ、つて言つてやつたんだ」

「よそに……つて浮気するつてこと？」

「馨がぎよつとしたように言う。」

「モモコはなあ、ちよつと安心しすぎてるんだ。ついでに、亭主を理想化しすぎてもある」

自分が好きになつて結婚した相手なのだから、ずつと素敵なままでいてほしい。そのためには素敵じゃないところは容赦なく指摘する。自分たちは相思相愛の夫婦なのだから、多少無遠慮な言葉を吐いても大丈夫……

そんな甘えがモモコの中にあるのではないか、とシンゾウは言う。

「でもさあ……素敵なままでいてほしいつて当たり前前の感情だと思っけど」

「それはそうなんだろうが、やつぱり物には言い方つてのがあるじゃねえか。ただでさえよくよ悩んでる男相手に、とどめを刺すようなことを言つたんだと思うよ。あいつはそれについて何にも言わねえが、派手に夫婦げんかをやらかしたような気がする。それで帰りにくくなつてるんじゃないか……」

モモコの夫から全然連絡が入つてこないのがその根拠らしい。今までなら、たとえ一泊二日の帰省であっても、夫のほうからシンゾウあてに『お世話になります』という電話があつた。ところが、

今回に限って音沙汰なし。滞在も長く、モモコの身体のことだって、カノンのことだって気になるはずなのにおかしすぎる、とシンゾウは説明した。

「なるほど……そう考えると納得がいきますね」

「親しき仲にも礼儀あり、つて言うじゃないか。それがあんまり崩れすぎると、男は家を港と思えなくなる。最初はそれですんでも、そのうちよそに港がほしいと思うようになったつて不思議じゃねえ」

「確かにそうかも……あたしも気をつけなきゃ……」

哲君がよそに行っちゃったら困る……と馨はちよつと泣きそうな顔になった。シンゾウは、気をつけてれば大丈夫だろうさ、なんて馨を慰めながら話を続ける。

「モモコは旦那にしゃんとしてほしくて、きつい言葉を使っちゃまったんだと思う。あの性格だからしゃべってるうちにどんだんエスカレートしちゃまった可能性もある。旦那だって面白くなかったに違いねえよ」

モモコが、夫相手に言い募る様子が目に浮かぶ。なんでもできて自信たっぷりのモモコだけに、夫はさぞや傷つくことだろう。

「感情的にまくし立てたんじゃ、相手を心配する気持ちは伝わらねえ。家だから、女房相手だから吐いた弱音を、そんな風に叩きつぶしちゃいけねえよ」

「でも話を聞く限り、モモコさんの旦那さんって、けっこうへたれな感じだけど……」

馨は遠慮会釈のない感想を述べる。美音は、あんたはそういうところを気をつけないといけな  
いんじゃないの？ と心配してしまうが、馨は本人相手じゃなければいいとも思っているらしい。  
あとでちよつとお小言だな、と思いつつながら美音はシンゾウに訊く。

「本当にそういう感じなんですか？」

「あの男は頑張り屋だよ。医者になれなかったことを悔やんでるのかもしれないが、薬剤師の仕事  
を疎かになんてしてない。最新の知識もちゃんと仕入れてるし、たまに会うときは俺の経験談なん  
かも聞きたがる。失敗しても、同じことを繰り返さねえようにちゃんと気をつけてる。きつと今で  
も、外ではほりつとしたい男なんだよ」

「じゃなきゃ、あのモモコさんが好きになつたりしないよね」

「ま、そういうことだな」

「でもさあ、それなら余計に、旦那さんが弱音を吐くつて聞きたくないかも。モモコさんにして  
みれば、こんな人じゃなかったはずなのに……つてならない？」

「そのあたりが、今回のもめ事の原因なんだろうな」

「気持ちわかりますけど、それじゃあ旦那さんも疲れちゃいますね……」

ふたりは薬剤師の国家資格取得を目指してずっと一緒に頑張ってきたと聞いた。モモコの夫は優



秀で、モモコが教えを乞うことも多かつたらしい。けれど、ひたすら頑張っていた学生時代のイメージを保ち続けるのは大変だろう。特に結婚した相手からそれを求められては、気を許せる場所がなくなってしまう。

「気を許してる相手だからこそ弱音が吐けるんだよね……ってことは、泣きごと言いまくりの哲君は……」

えへへ……と馨は嬉しそうに笑う。よかつたな、とシンゾウも笑い返した。

「モモコさんは、シンゾウさんの話を聞いて帰る気になったんですね。よかつた……」

そう言いながらも美音は、何となく腑に落ちなかった。何でもできて自信たつぷり、親にさえ泣きごとひとつ言わないモモコが、シンゾウの話を聞いただけで弱音を吐く人間の気持ちを理解するとは思えなかった。

「それがな……あいつも最初は納得しなかつたんだ。結婚する前だつてしてからだつて同じ旦那だ、それなのに……って」

「じゃあどうして……?」

「モモコが言いたい放題できるのは安心してらるからだろう、って言つてやつた。彼氏ならいざ知らず、旦那なら何を言つても許してくれるって思つてるだろう。言いたい放題してストレス発散してるんじゃないのか。そいつは形こそ違え、旦那が弱音を吐く気持ちと同じだぜって」

「……そうですね……」

どっちも同じ、家族に対する甘えだ、と言われればそのとおりだった。しかも、過ぎる言葉は頻繁な弱音以上に相手にとつて負担なのだと言われてしまえば、ぐうの音も出ない。

「あー、それもわかる。さすがシンゾウさん!」

馨は感心して手放してシンゾウを褒める。だが、シンゾウはなぜか急に居心地悪そうに、椅子の上でもぞもぞと身体を動かした。

「どうかしました?」

「それがよお……」

実は受け売りなんだ、とシンゾウは気まずそうに言う。

「タクのとーちゃんと話したときに、あんたも毎日忙しそうで大変だな、って言つたんだよ。あんまり疲れた顔してたからさ。ま、ここまで来たなら帰りに美音坊のところでいい酒呑んで、旨いもの食つて、ついでに愚痴でも吐いていきなつてさ」

「あら、それは宣伝ありがとうございます」

要は相変わらず遅い時間にばかり現れる。でも、このところはあまり疲れた様子を見せていない。新しく任された仕事は大変だけど楽しい、とばかり言つていた。その要が、シンゾウにはそんなに疲れた様子を見せたのが美音には意外だった。

「いや、あからさまに疲れた、って感じじゃねえが、俺も商売だから何となくわかる。これは相当根詰めてるなあってな。で、もう夕方だったから、なんなら一緒に行くか？　って誘ってみたんだ」  
「え、でも……」

馨が記憶を探るように目を泳がせた。ここ数日、シンゾウと要が連れだつて来たことなどなかったはずだ。

「ああ、きっぱり断られちゃったんだ」

「あれー、勧誘失敗かあ……。つれないなあ、要さん。寄ってくればいいのに」

「あいつな、工事のことでなんだかもめたばっかりだったらしい。このまま『ぼったくり』に行ったら愚痴吐きっぱなしになるから今日はやめておく、って言つてた」

「別に愚痴ぐらい聞くのに……。うちはそういう店なんですから」

「俺もそう言つたんだよ。美音坊なら聞いてくれるぞ、って。だがな、今の気分だと、仕事相手を罵りまくりそうだから遠慮しておく、だとさ」

シンゾウが、それだつて愚痴のうちだろう？　と返すと、要はきっぱり言つたそうだ。

『おれってなんて無能なんだ、って嘆くだけならまだしも、あいつのせいで上手くないか、とか言い出すのはみつともないですよ。人の悪口って、聞いて気持ちがいいものじゃありません。誰かを貶める言葉は、たとえ自分に向けられたものじゃなくても、気分をささくれ立たせる気がします。』

だから今日はパスさせてください』

せつかく誘つてもらつたのに申し訳ありません、と頭を下げ、要は去つていったそうだ。

「確かに、きつい言葉つてのは誰の耳にもきつく聞こえると思つたね。モモコは愚痴ばかりつて言うけど、あいつにぼんぼん言われる旦那だつてたまらねえだろう。人の悪口どころか、もろに自分への非難だからな。たとえ心配からくる叱咤激励しつたげまげいにしたつて、モモコの言葉は容赦なさすぎる。限度があるさ」

そのあと家に帰つたシンゾウは、その話をモモコにしたという。

家族だからつて何を言つてもいいつてもんじゃない。愚痴を吐くのも、不用意な言葉をぶつけるのも、甘えの一種だ。もしもお前が旦那の愚痴を聞きたくないと思うのなら、旦那だつてお前のきつい言葉なんて聞きたくないだろう……

モモコは黙つて考えていたあと、二階に上がつていったそうだ。おそらく夫に電話をかけるに行つたのだろう。しばらくしてすっきりとした顔で下りてきたモモコは、そろそろ帰ることにする、と言つたらしい。

「やっぱりモモコさんつてすごいです。悪いと思つたらすぐに謝れるんだから」

頑として自分の非を認めない人間もいる。けれどモモコは、シンゾウに言い聞かされたことで自分にも悪いところがあつたと認め、すぐに謝つた。それは決して簡単なことではない。

モモコにそれができるのは、おそらく小さいころからシンゾウやサヨがそのように育ててきたからだろう。間違ったら直す、迷惑をかけたら謝る、というシンゾウ夫婦の背中を、モモコはしっかり見て育ってきたに違いない。

美音がそんな感想を漏らすと、シンゾウはちよつとくすぐったそうな顔で言った。

「人間は間違ふものさ。でも、そのあとどうするかで値打ちが決まるからな」

「ほんどだね。あたしも見習わなきゃ！ これで一件落着。でもシンゾウさんもサヨさんも、寂しくなっちゃうね」

「こんな暮らしに慣れると、あとが大変だから、このあたりが頃合いだろうさ」

店番を代わってもらえるのは楽だからなあ、とシンゾウは笑う。それでも、どこかモモコが帰ってしまふ寂しさが滲しみんでいて、美音は切なくなる。

「赤ちゃんを産みに帰ってくるの、楽しみだね！」

「楽しみばつかりじゃねえけどな、赤ん坊って大変だし」

「とか何とか言っちゃって〜！」

ふたりのお孫さんを引き連れて町中見せて歩くんでしょ、と馨に突っ込まれ、よせやい！ と言いつ返す。それでも、何ヶ月か先に実現するその光景を想像したらしく、シンゾウの目尻がわずかに下がった。

「モモコさんの件は無事解決。よかったね、お姉ちゃん。それにしても要さん、かつこいいね。漢字の漢かんって書いて『おとこ』って感じ」

シンゾウを見送ったあと、馨がそんな感想を漏らした。

愚痴ぐちも人の悪口もどれだけ言ってくれても構わない。それで少しでも楽になれるなら、ちゃんと全部聞く。

確かに、悪口を言う人はいいい印象を与えない。けれど、普段から黙々と頑張っている人が、耐えかねたように漏らす悪口はちよつと違う。たかが呑み屋の店主にそこまで気を遣える要が、人の悪口を言いたくなつたのは、それだけ相手がたまりかねるようなことをしたからだろう――

そう思えるほどには、要という客を理解しているつもりだった。それが彼自身に伝わっていなかったことが、美音にはとても寂しかった。

「そんないいかつこしなくても、ちゃんとわかっているのに……」

「かつこつきたいお年頃なんじゃない？」

うちの常連の中では若いほうだし、まだまだ見栄も張りたいんだよ、と馨は笑う。

「無理して全部呑み込まなくていいじゃない。外に出すのはきれいで優しい言葉ばかり。そんなだからサヨリになっちゃうんだよ」

「サヨリって？」

「お腹の中が真っ黒なんだって、あの人。自分でそう言ってたわ」

「なにそれ！」

馨はそれを聞いたときの美音同様、盛大に笑いこけたあと、したり顔で続ける。

「でもまあ……サヨリの外見しか知らない人は、お腹の中があんなに真っ黒だってわかったらびっくりしちゃうよね。見せないほうがいいのかも……」

そう言うとき馨は壁の時計を見上げ、いそいそと帰り支度を始めた。おそらく、急いで帰って哲に連絡でもするのだろう。

——おれだって人間だからたまには落ち込むし、うじうじもする。おれが本気で愚痴りだしたら目も当てられないよ。罵詈雑言吐きまくるかも。

以前、要はそう言っていた。それなのに、実際の彼はそういう思いを全部お腹に閉じ込めて、一生懸命きれいな外見を守ろうとしている。

モモコが言いたい放題になったり、モモコの夫が弱音を吐きまくったりするのは、お互いへの信頼があるからだ。その信頼に甘えすぎているわけではないというの事実だし、シンゾウとの会話から推察するに、要もそう考えているらしい。けれど、弱いところや汚いところは一切見せません、言葉

も姿もきれいなところだけご覧ください、というのはあまりにも無理のしすぎ、意地の張りすぎのよりに思えた。

美音は、意地っ張りなサヨリの姿を思い浮かべる。おそらく今日も、へとへとになるまで仕事をし、疲れ切っていることだろう。

彼にだって、本当の自分を見せられる相手が必要だ。お腹が真っ黒でも真っ白でも気兼ねなくさらけ出せる相手が……。要のために、どこかにそんな人がいてほしい。

そう願った瞬間、美音の心の中に微かな風が吹いた。その風の微妙な冷たさが、お前も意地っ張りなサヨリだよ……と囁いてるようだった。

柔らかく包み込むもの

ホホメサシムダ

豚肉のエキス

カールパンの酵母

レモンのお砂糖漬

## サヨリの腹が黒い理由

サヨリのお腹は、なぜ黒いのでしょうか？ その理由はあの美しい外見に関係があるのだそうです。

サヨリは昼行性の魚で、しかも海面近くを泳ぎます。青白く半透明な身は太陽の光を通しやすく、身体を透過した紫外線が内臓にダメージを与えかねません。真っ黒なお腹（正確には腹膜）は、紫外線から内臓を守るためのものと言われています。

さらに、サヨリは植物性プランクトンを餌としています。もしも太陽光がお腹に届いてしまうと、生きたまま呑み込まれたプランクトンがお腹の中で光合成を始めてしまいます。それを防ぐためにも黒い腹膜は大変有効、というわけです。

美しい外見のために腹黒にならざるを得なかったサヨリ。『腹黒で、サヨリみたい』と言われる人にも、何か理由があるのかも……なんてちょっと思ってしまうます。



まさいづみ  
満寿泉吟醸

株式会社樹田酒造店

〒931-8358

富山県富山市東岩瀬町 269 番地

TEL : 076-437-9916 FAX : 076-438-6763

URL : <http://www.masuizumi.co.jp/>